

令和 2 年 4 月 29 日現在

機関番号：28001

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2019

課題番号：15K02183

研究課題名(和文)近代日本のラジオ放送における音楽文化とアイデンティティ形成に関する基礎的研究

研究課題名(英文)The creative process of the local identities among the creation of music programs by NHK in modern Japan.

研究代表者

三島 わかな(MISHIMA, WAKANA)

沖縄県立芸術大学・付置研究所・研究員

研究者番号：60622579

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は日本放送協会および台湾放送協会制作のラジオ番組を対象に、音楽芸能を題材とした番組コンテンツを解明し、国内各地の音文化が何を表象したのかを考察した。日本放送協会の主要事業「国内放送」「国際交換放送」「海外放送」に分けて傾向を捉え、各事業の年代変遷および番組傾向や特徴の解明に努めた。内地における全国ネットワーク化事業は地方文化の発見と掘り起こしをもたらした。同時に地域間の対抗意識を番組リスナーにもたらし、音楽文化の発信面で、国際交換放送および海外放送に共通する傾向は日本国歌、各種邦楽や新日本音楽、日本各地の民謡が積極的に放送された点にある。台南や台中放送局の開局後、台湾音楽も放送された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ラジオ放送に関する先行研究では、放送技術や機構といったハード面への関心や戦時下のプロパガンダとしての放送傍受といった観点での関心が高かった。一方、番組コンテンツに関する研究は後発的であるため蓄積はそれほど多くなく、そこでは特定の番組が対象とされてきた。そのため先行研究では「放送事業ごとの意義の違い」や「放送事業の年代的推移」という観点をもちあわせていなかった。そういう研究状況や水準を鑑みた本研究では、戦前・戦中のラジオ放送が番組づくりにあたって伝統音楽の継承のあり方や演奏上の正統性を確認していた点を明らかにし、新しい放送文化の創出という意味でラジオ放送が推進的機能を果たしていたことを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：This study made out the activities of music in broadcasting culture for radio programs produced by the Japan Broadcasting Corporation and the Taiwan Broadcasting Corporation.

Analyzing the NHK's business format: "Domestic broadcasting: started in 1926", "International exchange broadcasting: started in 1930", and "overseas broadcasting: started in 1935", worked out the chronological changes of each business and the trends and characteristics of programs.

International exchange broadcasting after the Tripartite Alliance required Japanese music, mainly from Germany. In overseas broadcasting, folk songs from all over Japan were desired, mainly in Hawaii, where a lot of Japanese immigration and Japanese Americans lived, and many were broadcast. The Taiwan Broadcasting Corporation was originally a Taipei Broadcasting Station (starting in 1928), but with the opening of the Tainan and Taichung Broadcasting Stations, music from each area of Taiwan were broadcast including indigenous culture.

研究分野：音楽学、近代音楽史

キーワード：メディア 表象 ローカル・アイデンティティ ナショナル・アイデンティティ 植民地の文化 伝統  
音楽・伝統芸能 創作手法 複数の言語

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

ここでは、メディア研究の第一人者であるマクルーハン、マーシャルによる「メディアはメッセージである」(McLuhan, Marshall *Understanding Media: The Extensions of Man*, 1964)の発表以降の背景について、本研究の主要分野・領域となる「音楽学」ならびに「沖縄学」の研究動向について述べたい。

日本国内の音楽学分野において、ラジオ放送を対象とした研究の嚆矢は1960年代末の松前紀男の研究であり、それはラジオ放送の中身(コンテンツ)に関する研究だった(松前紀男「放送黎明期における洋楽放送について」『音と思索～野村良雄先生還暦記念論集』1969)。ところがその後の30年間は松前に後続する研究が無く、断絶する。ラジオ放送のコンテンツに関する研究は20世紀に入ってから本格的に始動したと言える。そうとはいえ、20世紀に入ってから音楽学分野の研究の多くは大都市の主要局に関わる動向に視点を置いており(一例:武田康孝「ラジオ時代の洋楽文化～洋楽番組の形成過程と制作者の思想を中心に」『総力戦と音楽文化～音と声の戦争～』2008他)したがって中央史観の構築に寄与してきた。

一方、沖縄学の領域では放送史をはじめ、総じて第二次世界大戦後の戦後史にかかわる研究が蓄積されてきたものの、戦前・戦中の歴史構築については(史料収集の困難さもあって)課題が山積した状況だった。したがって本研究が対象とした近代沖縄の放送環境や放送文化についても殆ど明らかにされておらず、空白の近代沖縄史を埋めるための基礎的作業が待ち望まれる状況だった。

### 2. 研究の目的

本研究では戦前から戦中のラジオ放送を対象に、ローカリティの解明ならびに国民統合と地域性との関係構築の側面を重視しながら、放送文化における音楽文化の創造発信と享受のありようを紐解くことを目的とする。

その視座は大都市偏重型ではなく、日本各地の動向を重視する。本研究では中央と地方の関係性のみならず、植民地台湾や日系移民先としてのハワイも視座に含めている。

中心的な解明点は、近代以前から日本に既にある音楽(伝統音楽)と外来音楽(洋楽、植民地の音楽)ならびに各地で近代以降に生成された楽種が放送文化としてどのように扱われたのかにある。自文化と異文化が放送文化として様々な次元で行き交い、そのなかで両者の関係性が創造的に構築されたことを実証することが目的である。

研究の最終段階では、考察対象とした各地域の様態を比較・検討・相対化をはかることによって、文化創造とアイデンティティ(ローカルアイデンティティおよびナショナルアイデンティティの構築)の関係性の観点から「近代日本」という枠組みの再解釈をはかることを目標とする。

### 3. 研究の方法

(3-1)以下に挙げる四つの地域ごとに、ラジオ番組のコンテンツに関する史資料の収集を行ない、さらに収集した史資料の分析(制作者、出演者、番組のねらい、放送された楽種、何を表象したか)をつうじて、各々の番組の意義と音楽文化の位置づけについて考察をはかった。

-1 内地: 沖縄県および九州各県(日本放送協会運営: 熊本中央放送局管轄下の各局) 沖縄県および九州各県の俚謡や民謡、新民謡曲などがラジオ番組の中でどのように発信されたのかを明らかにした。沖縄の音楽文化を扱った番組では、「琉球的なもの」「沖縄的なもの」という意識がどのような楽種(楽曲)によって表象されたのかを明らかにした。

具体的な方法としては、全国紙(『東京朝日新聞』『読売新聞』)ならびに地方紙(『九州日日新聞』『琉球新報』その他)に掲載されたラジオ欄から情報を収集し、データベースを作成ならびに分析をはかった。

沖縄県内学校が発刊した学校記念誌の悉皆調査ならびに沖縄県内の地方自治体が刊行した自治体史の悉皆調査をつうじて、戦前のラジオ受信に関する回顧録に基づくデータベースを作成し、分析をはかった。

NHK 放送博物館所蔵の番組確定表を調査し、新聞掲載のラジオ欄の情報とのすり合わせをはかった。

NHK 放送博物館所蔵の放送用台本を調査し、沖縄や琉球の芸能・音楽を題材としたラジオ番組の作品分析を行った。

熊本中央放送局の制作番組に関する台本調査を実施した。

福岡放送局の制作番組に関する台本調査を実施した。

-2 内地: 大阪中央放送局ならびに名古屋中央放送局管轄下の地方局

大阪中央放送局の制作番組に関する台本調査を実施した。

富山放送局の制作番組に関する台本調査を実施した。

外地: 植民地台湾(台湾放送協会運営: 台北放送局、台南放送局、台中放送局)

中国大陸由来の音楽(南管、北管、劇音楽)をはじめ台湾の先住民の音楽、さらには流行歌や国民音楽などの近代以降に創られた新作ジャンルを含めて、植民地における

音楽文化のありようを解明した。  
具体的な方法としては、『台湾日日新報』『台南新報』『台南日報』に掲載されたラジオ欄から情報を収集し、データベースを作成ならびに分析をはかった。  
台北放送局の制作番組「子どもの時間」で使用された台本調査を実施した。  
台北放送局の制作番組「子どもの時間」の出演者への聴き取りを行った。  
台北市内を拠点として戦前に活動を繰り広げた児童劇団を対象に、台北放送局との関係性に関する調査を行った。

#### 国際交換放送（日本放送協会運営）

財団法人国際文化振興会（略称 KBS）の対外文化事業における国際交換放送の活用の実態（対象地域、コンテンツ等）を解明した。どのような音文化を海外に発信したのかを解明することを通じて、近代日本人の自己認識のありようを考察した。  
具体的な方法としては、KBS の機関誌『国際文化』に掲載された国際交換放送に関する情報を収集し、データベースを作成ならびに分析をはかった。  
あわせて、全国紙（『東京朝日新聞』、『読売新聞』）に掲載されたラジオ欄から国際交換放送に関する情報を収集し、データベースを作成した。あわせて『国際文化』掲載記事との内容面でのすり合わせを行ない、考察を加えた。  
外務省文書の中から、国際交換放送に関する文書を収集し、分析をはかった。

#### 海外放送：（日本放送協会運営：北米西海岸・ハワイ向け海外放送）

日系移民（沖縄系移民を含む）を対象として、故郷の音楽の聴取の様相を明らかにした。オアフ島（KGU 放送局、KGMB 放送局）で受信された「北米向け海外放送」を対象に、放送内容と受信状況を解明した。  
具体的な方法としては、ハワイ大学はミルトン図書館所蔵の『日布時事』『ハワイ報知』に掲載されたラジオ欄から情報を収集し、データベースを作成ならびに分析をはかった。  
現在ハワイに在住する 90 歳前後の世代を対象として「北米向け海外放送」の聴取者の確認を行った。  
米国国立公文書館（NARA II）が所蔵する「海外向け放送」の音源の所蔵状況について情報収集し、現地調査へ向けた予備的調査を継続的に実施した（なお、本事業の最終年度となる 2020 年 3 月、米国国立公文書館所蔵「海外放送」の録音音源の調査予定だったが、渡航直前に米国内で covid-19 が爆発的な感染状況となったため渡米を中止した）。  
外務省文書の中から、海外放送に関する文書を収集し、分析をはかった。

#### (3-2) ラジオ番組の聴取面に関する調査

具体的な方法としては、上記(3-1)内に記載した一次史料ならびに日系の海外移民の人びとが講読していた各種雑誌からラジオ放送に関する記事を収集した。さらに、それらの情報にもとづいて、聴取面（受信の様態、加入率、聴取層の年代的推移、番組への反響、リスナーの価値観）に関するデータベースを作成し、分析をはかった。そこから、放送が国民に与えた影響という観点で考察をはかった。

#### (3-3) ラジオ番組内で使用された音源を特定する

具体的な方法としては、上記(3-1)内に記載した一次史料ならびに国立国会図書館の「歴史的音源」を使用して、音楽的実態（放送に使用されたレコードのレーベル、楽種、演奏団体、演奏形態、音楽様式的特徴）に関する解明に努めた。  
戦前・戦中のレコード会社（日本コロムビア、キングレコード他）の商品カタログを用いて、ラジオ欄に掲載されている演奏曲情報（楽曲名、作詞・作曲家名、演奏者名等）とのすり合わせをはかった。

## 4. 研究成果

ここでは、(1)戦前・戦中の沖縄県での聴取の実態と意義、(2)日本放送協会運営による「国内（内地における）放送」、(3)「国際交換放送」、(4)「海外放送」、(5)台湾放送協会運営による「植民地台湾での放送」に分け、それぞれの研究成果について述べたい。

### (1) 戦前・戦中の沖縄県での聴取の実態と意義

まず、戦前・戦中の沖縄県でのラジオ放送の受信の実態にかかわる解明点について述べたい。小学校という場における受信器普及の最大のチャンスは創立記念日だった。受信器は県外や海外へ出稼ぎしている人びとや海外移民を果たした人びとの成功の証として象徴的なモノであり、郷里を離れて暮らす人びとは母校の創立記念日にラジオ受信器を寄贈していた。ラジオ体操は1940

年前後の国策と相まって沖縄県内でも他府県と同様に普及した。その理由のひとつとして、当時、大政翼賛会の指導下で従来の村芝居の観衆に媚びる不面目な遊興気分が見直され、新たに「巴祭り」が提唱されたことが背景にはある。そこでラジオ体操も「特殊な娯楽」として村芝居のプログラムに組み込まれ、琉球舞踊や古典劇、民俗芸能や新作歌曲等とともに沖縄の人びとによって享受されていた。そして沖縄県内の教育関係者も標準語教育の促進をめざして、実際の響きによってイントネーションを学ぶことのできるラジオ放送に対して大きな期待を寄せていたことがわかった。

## (2) 国内（内地における）放送（1926～45年）

ここでは、放送にかかわるテクノロジーの進展とラジオ番組の内容の変遷という観点で報告する。その観点でいえば、二つの画期があったと考えられ、ひとつが「全国中継放送の開始」であり、もうひとつが「録音放送の導入」である。具体的に以下に述べる。

日本国内の内地では、1928年より国内各地を放送網で結ぶ大事業が着手され、そういったインフラ面の整備や放送技術の進展を背景に全国中継放送がスタートした。そのことは番組づくりのあり方を考えるうえで大きな転機となったと言える。それ以前の七つの中央放送局（札幌、仙台、東京、名古屋、大阪、広島、熊本）の他に、一県一放送局を開局するという方針が打ち立てられ、1928年以降は地方局が順次開局していった。そういう状況は、地方の文化つまりローカル文化の掘り起こしを促進させることへ繋がった。折しも1928年以降は郷土教育運動が文部省の政策となり、全国の師範学校を中軸として郷土文化研究が実施された時期と重なる。この時期について言い換えれば、大正期以降の日本民俗学の研究潮流のもとで、放送メディアによる番組づくりの方向性と日本の教育界の施策の方向性が合致した時期と言えよう。そこでは全国各地の歴史、俚謡や民謡、伝説などが次々と掘り起こされ、みずからの郷土が全国の人びとによって見直されていた。同時に、近代以降の大衆化を経て、その結果として日本各地の伝統音楽や花柳界で演奏される音楽の演奏様式も多様化していた。そこで問われたことが「何が本物か」という正真性の問題だった。ラジオ番組においても、オーセンティックな演奏をお茶の間に届けることが使命とされ、番組づくりにあたって正真性が問われるところとなっていた。

二つ目の画期は1937年における録音放送の導入にあった。それ以前の番組の制作方法はレコードに頼るか、もしくはスタジオ内での生出演や生演奏のいずれかの手段だったが、1928年以降は事前に録音した音素材を編集して番組を構成するといった手法も可能となった。録音技術の導入が番組づくりにおいて新たに可能にしたのは「野外の音・環境音」言い換えれば「非楽音」が多様なかたちで番組内に取り込まれるようになった点にある。したがって国内各地の多様な場所に出向いてさまざまな音を収録することによって、いわゆるサウンドスケープ（環境音）も素材となり、番組のありかたそのものも多様化したと考えられる。

国内調査としては、大阪放送局ならびに地方局（大阪、福岡、富山）の所在地にある大学図書館および主要図書館において、個人寄贈等のコレクションをはじめとする放送台本の調査を実施した。それらの調査の結果として明らかになったことは、日本放送協会の放送網が充実・拡張をみせた1930年代以降、太平洋戦争が激化する以前の1942年頃までの期間は、東京・大阪・名古屋・札幌・仙台・広島・熊本の主要局のみならず国内各地の地方局（今回の調査は富山および福岡に限定）においても放送台本が制作されていたことである。この結果を踏まえてそこから推察されることは、今回の調査地である富山や福岡以外の地方局の周辺地域においても、その土地の文化人や教育者など地域に根ざした人びとの手による放送台本が残されている可能性が十分に考えられるということである。つまり放送台本は必ずしも専門の放送作家だけが制作したのではな

いということである。

### (3) 国際交換放送(1930～45年)

国際交換放送開始年の1930年から40年代にかけては、当初のアメリカ合衆国との交換から、日独伊三国同盟前後頃にはイタリア、ドイツを主な交換相手とし、さらに1940年代に入ると交換相手としてタイ国なども含まれるようになった。このことより、国際交換放送においては相手国の年代的推移が顕著で、かつ国際情勢と密接であり、放送内容的にも外交問題に大きく左右されていたことが明らかとなった。あわせて、国際交換放送の初回に出演した吉田晴風の文化使節としての訪暹に注目し、当時の対外的な文化の発信において邦楽(新日本音楽)が重視されたことを明らかにした。

### (4) 海外放送(1935～45年)

海外放送は可聴地域的・放送時間的・使用言語的にも事業を多角化させ、北米・ハワイ・南米や南洋群島、東南アジア諸国でも日本の国歌や邦楽、民謡等の音楽が多く放送されたことが明らかとなった。とりわけ海外放送のリスナーたちは、日本国歌(君が代)と各種邦楽を最も多くリクエストしたことが明らかとなった。つまり国歌そして邦楽は、日本という故郷を遠く離れて生活する日系移民1世のノスタルジーを慰めるための一助となったと考えられる。けれども、その子どもの世代(日系移民2世)においては状況が異なった。彼らは移民先の現地語でラジオ放送を聴取していたため、1世である親の世代とは反応が大きく異なった。つまり日本社会での生活経験をもたない日系2世にとっては、日本国歌や邦楽は彼らの心理や感覚に訴えるものではなく、当然ながら郷愁を呼び起こす音楽ではなかった。

日本の外務省文書を対象に、海外放送に関する各種文書を調査した結果、国際連盟脱退後の日本の対外政策において海外放送の役割や重要度が増したこと、そしてラジオ放送による日本の音楽文化の対外的な新しい発信のありようを確認することができた。

### (5) 台湾放送協会運営の放送局(1931～45年)

台北放送局の制作番組においては、社会教育のための団体及び施設として、国語講習所や国語普及会などと併せてラジオが挙げられていたことから、ラジオ放送普及の主な目的の一つが台湾人に対する日本語教育と同化教育にあったことがわかった。台湾総督府文教局の指導のもとで「国語普及の時間」という番組が放送されており、この番組では各地の国語教習所などで日本語を学んだ台湾人が出演し、日本語によるお話しや歌を披露していた。そのほかに教養番組以外も充実し、専門家のみならず地元の音楽愛好家や児童生徒がラジオ番組に出演し、児童劇や音楽演奏、朗読などを披露していた。1932年4月の台南放送局開局後は多様な音楽が放送されていた中で、リスナーからは台湾音楽をリクエストする声もあがっていたことがわかった。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 三島わかな	4. 巻 20
2. 論文標題 海外放送と在留邦人：戦前の日本放送協会の海外放送を対象に	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 沖縄県立芸術大学音楽学研究誌『ムーサ』	6. 最初と最後の頁 41-51
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 酒井健太郎	4. 巻 12
2. 論文標題 1930年代のラジオ「国際放送」の音楽コンテンツ：日本人の「文化的アイデンティティ」に関する考察に向けて	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 昭和音楽大学アートマネジメント研究所『音楽芸術運営研究』	6. 最初と最後の頁 35-56
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 長嶺亮子	4. 巻 20
2. 論文標題 「台湾を「描く」－内地人向けレコードにみる台湾－」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 沖縄県立芸術大学音楽学研究誌『ムーサ』	6. 最初と最後の頁 31-40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 酒井健太郎	4. 巻 9
2. 論文標題 昭和初期の対外文化政策としての 国際放送 1930年クリスマスの交換放送に注目して	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 音楽芸術マネジメント	6. 最初と最後の頁 149～155
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 三島わかな	4. 巻 29
2. 論文標題 ラジオ受信環境と文化：戦前の沖縄本島を事例として	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 沖縄芸術の科学	6. 最初と最後の頁 35, 56
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 三島わかな	4. 巻 24
2. 論文標題 近代沖縄でのラジオ放送の聴取 本島周辺の離島を対象に	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 沖縄県立芸術大学紀要	6. 最初と最後の頁 15, 28
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 三島わかな	4. 巻 17
2. 論文標題 ラジオドラマと音楽 川平朝申の脚本集を事例に	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 ムーサ 沖縄県立芸術大学音楽学研究誌	6. 最初と最後の頁 45, 57
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 長嶺亮子	4. 巻 17
2. 論文標題 1932年の台湾におけるラジオ音楽番組の状況	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 ムーサ 沖縄県立芸術大学音楽学研究誌	6. 最初と最後の頁 31, 43
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計10件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 3件）

1. 発表者名 三島わかな
2. 発表標題 音による琉球・沖縄の表象 日本放送協会のラジオ番組を対象に
3. 学会等名 沖縄文化協会 2018 年度公開研究発表会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 酒井健太郎
2. 発表標題 . 1930年代の日本の文化的アイデンティティ ラジオの国際放送における音楽コンテンツの分析から
3. 学会等名 第12回国際日本語教育・日本研究シンポジウム（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 酒井健太郎
2. 発表標題 日本とタイのラジオ放送による交流 昭和10年代を中心に
3. 学会等名 日タイ言語文化研究会第6回東京大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 酒井健太郎
2. 発表標題 1937年の訪暹音楽・舞踊使節について：日本とタイの文化交流の一事例として 4（機会名）. タイ国日本研究国際シンポジウム2018
3. 学会等名 タイ国日本研究国際シンポジウム2018（国際学会）
4. 発表年 2018年



1. 発表者名 三島わかな
2. 発表標題 “琉球・沖縄”はどのように表象されたか
3. 学会等名 一般社団法人東洋音楽学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 酒井健太郎
2. 発表標題 昭和初期の国際交換放送にみる“日本らしさ”とは
3. 学会等名 一般社団法人東洋音楽学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 長嶺亮子
2. 発表標題 内地向け放送にみる“台湾らしさ”とは
3. 学会等名 一般社団法人東洋音楽学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 遠藤美奈
2. 発表標題 北米向け海外放送にみる“故郷日本”の表象
3. 学会等名 一般社団法人東洋音楽学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Wakana MISHIMA (三島わかな)
2. 発表標題 How did the Radio broadcast help Cross-Cultural Communication in the 1930s?
3. 学会等名 ISIC12・SICRI (国際小島嶼文化会議) (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 酒井健太郎
2. 発表標題 昭和初期の対外文化政策としての 国際交換放送 音楽・芸能分野を中心に
3. 学会等名 日本音楽芸術マネジメント学会第9回冬の研究大会
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 三島わかな	4. 発行年 2020年
2. 出版社 七月社	5. 総ページ数 384
3. 書名 沖縄芸能のダイナミズム 創造・表象・越境	

1. 著者名 三島わかな	4. 発行年 2016年
2. 出版社 東洋館出版社	5. 総ページ数 269
3. 書名 文化としての日本のうた	

1. 著者名 三島わかな	4. 発行年 2017年
2. 出版社 シンセイアート株式会社	5. 総ページ数 195
3. 書名 川平朝申のライフコースを基軸とした戦前から戦後沖縄の教育・文化実践史研究	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>沖縄文化協会 2018 年度公開研究発表会  <a href="http://okinawabunka.c.ooco.jp/2018okinawabunka_publ_1.pdf#search='%E6%B2%96%E7%B8%84%E6%96%87%E5%8C%96%E5%8D%94%E4%BC%9A+%EF%BC%92%EF%BC%90%EF%BC%91%EF%BC%98%E5%B9%B4%E5%BA%A6+%E5%85%AC%E9%96%8B'">http://okinawabunka.c.ooco.jp/2018okinawabunka_publ_1.pdf#search='%E6%B2%96%E7%B8%84%E6%96%87%E5%8C%96%E5%8D%94%E4%BC%9A+%EF%BC%92%EF%BC%90%EF%BC%91%EF%BC%98%E5%B9%B4%E5%BA%A6+%E5%85%AC%E9%96%8B'</a>          東洋音楽学会第68回大会プログラム  <a href="http://tog.a.la9.jp/meeting/2017/2017pro.pdf">http://tog.a.la9.jp/meeting/2017/2017pro.pdf</a>          沖縄芸術の科学：沖縄県立芸術大学附属研究所紀要  <a href="http://www.ken.okigei.ac.jp/kiyou/kiyou_index.html">http://www.ken.okigei.ac.jp/kiyou/kiyou_index.html</a>          (ISIC12) Book of Abstracts and Programme.  <a href="http://sicri-network.org/ISIC12/ISIC12-Book-of-Abstracts.pdf">http://sicri-network.org/ISIC12/ISIC12-Book-of-Abstracts.pdf</a></p>
---

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	長嶺 亮子 (Nagamine Ryoko)  (30589784)	沖縄県立芸術大学・付置研究所・研究員  (28001)	
研究分担者	酒井 健太郎 (Sakai Kentaro)  (60460268)	昭和音楽大学・オペラ研究所・准教授  (32716)	
研究協力者	遠藤 美奈 (Endo Mina)		